九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

デザイン基礎学研究センター活動報告（ 2024 年1月～ 2025 年12 月）

古賀, 徹
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

増田, 展大
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

結城, 円
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

https://doi.org/10.15017/7409226

出版情報：芸術工学研究. 41, pp.87-94, 2026-03-30. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

受付日：2025 年 12 月 17 日、受理日：2026 年 3 月 6 日

デザイン基礎学研究センター
活動報告（2024 年 1 月～ 2025 年 12 月）

Center for Design Fundamentals Research
Annual Report: 2024/1～2025/12

古賀徹 [1]　増田展大 [1]　結城円 [1]
KOGA Toru　MASUDA Nobuhiro　YUKI Madoka

概要：デザイン基礎学研究センターとは

デザイン基礎学研究センターは、「デザインとは何かを根底から考えることを通じてデザインのアイデンティティを確立し、デザインの各分野の融合を図るとともに、それによって従来のデザイン領域を拡張し、未来のデザインを構想すること」（設置趣意書）を目的として、2022 年 4 月に芸術工学研究院・部局内研究組織として設立されました。

「デザイン基礎学」とは聞きなれない言葉ですが、デザインを一つの学として成立させるための思考の蓄積を指します。そのために、デザイン史、芸術史、芸術批評、デザイン批評、美学、倫理学、認識論や存在論といった人文系の学問領域を基礎として、さまざまな研究領域とのクロスオーバーを目指しています。その活動の概要と詳細はウェブサイト（www.cdfr.design.kyushu-u.ac.jp）に掲載しています。

活動は以下の 4 つの柱を意識しています。

1. PROVOCATION：デザインを根底から問い直す刺激的な批評の実践
2. LITERACY：デザイン基礎教育・共通教育の開発と実践
3. SYSTEMATIZATION：デザイン方法論の解明とその体系化の試み
4. DIVERSIFICATION：デザインにおける文化的多様性の推進

2024 年度以降、研究センターの構成員は、古賀徹（センター長）、増田展大（副センター長）、結城円、髙橋百華、尾方義人、栗山斉の 6 名となり、およそ月 2 回の事務局会議・研究会を開催、各種の企画・実施に当たってきました。

以下は過去 2 年間（2024 年 1 月～2025 年 12 月）の活動概要と、その内容の報告です。

連絡先：古賀徹，designfundamentalseminar@gmail.com
1 九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門
Department of Design Futures, Faculty of Design, Kyushu University

はじめに：活動概要（2024 年 1 月-2025 年 12 月）

この 2 年間で、センターの主要な事業である「デザイン基礎学セミナー」を合計 6 回（第 29～34 回）開催しました。デザインという概念を広く、根本的に再考するという目的のもと、全国各地のデザイナーやアーティスト、研究者を招聘し、継続的に数十名の参加者とともに現地・オンラインのハイブリッド形式で議論を深めています（各回の詳細については、次の 1. PROVOCATION をご参照ください）。

それらの内容も踏まえつつ、芸術工学部・学府の授業、さらに共通授業「デザインリテラシー科目」のうち、「文化とデザイン」「社会とデザイン」「デザイン論Ⅰ・Ⅱ」などの内容の検討を進めています。（2. LITERACY を参照）。

また、2023 年から継続している「数理モデルデザイン研究会（Society for Math for Design）」はこの間、計 4 回を実施しました。「数理モデルのデザインを中心に位置づけ、『デザインのための数理モデル』と『現象理解のための数理モデルのデザイン』という座標軸を意識しつつ、研究と教育の視点から幅広く議論するサロン的な場を作ること」を目的として、引き続き、本研究院の丸山修教授を座長として実施されています。数理モデルという観点から、文系・理系を問わない講演者や参加者とともに多角的な議論を交わすことができました（3. SYSTEMATIZATION を参照）。今後については未定ですが、数理を基軸としたデザイン研究・教育についてもさらにヴァージョンアップしたかたちで推進したいと考えています。

これらの活動を継続するため、2024 年度からは新たに

博士課程所属の若手研究者も参加し、センターの定例会議を月 2 回の頻度で実施しています。ウェブサイト上では上記の活動のレビューなどにくわえて、基礎概念の執筆項目も拡充しているところです（計 7 項目）。

その他にも、センターのメンバーが企画・参加することで、デザインの文化的多様性を推進する活動も実施しました（4. DIVERSIFICATION を参照）。

以下では、2024 年 1 月から 2025 年 12 月までの活動内容から、その一部を紹介します。

1. PROVOCATION
：デザインを根底から問い直す刺激的な批評の実践

1. 1. デザイン基礎学セミナーの企画・主催

2024 年以降、合計 6 回のセミナーを企画・開催しました。詳細は以下のとおりです。各回の内容を振り返ったレビュー記事について詳細は、下記センターWeb サイトからご確認ください。

［デザイン基礎学研究センター・ウェブサイト］
www.cdfr.design.kyushu-u.ac.jp/category/seminar/

● 第 29 回デザイン基礎学セミナー
「文化的アイデンティティとしての科学技術〜東アジアの事例から」
日時　2024 年 2 月 14 日（水）
会場　九州大学大橋キャンパス・芸術工学図書館 1 階閲覧ホール＋オンライン開催
講師　佐倉統（東京大学、理化学研究所）
趣旨　科学技術が、ある国や社会の文化的アイデンティティを強化することがある。かつての日本の家電製品やアメリカの宇宙開発などが好例で、科学技術は成果が分かりやすくインパクトが大きいが、それゆえに愛国主義を助長するなどの負の側面もある。台湾を事例として、文化的アイコンとしての科学技術のあるべき姿やデザインが果たす役割などを検討する。

● 第 30 回デザイン基礎学セミナー
「美学から考える「場」とそのデザイン」
日時　2024 年 7 月 24 日（水）
会場　九州大学大橋キャンパス・デザインコモン 2F＋オンライン開催
講師　秋庭史典（名古屋大学）
趣旨　美学（感性論）の仕事が、自分と異なる人・もの・自然との協働から新たな感性を発見・言語化することだとすれば、そこでは協働の「場」が生まれています。こうした場、さらにはそのデザインについて、美学の立場から考えてみたいと思います。

● 第 31 回デザイン基礎学セミナー
「造形の原野へ：素材・技術・場所の連関をめぐって」
日時　2024 年 11 月 8 日（金）
会場　九州大学大橋キャンパス・印刷実験棟 2F＋オンライン開催
講師　井上明彦（アーティスト）
趣旨　原野とは、さまざまなものが未分化な地平をいう。そこはアートとデザイン、建築、土木が分離対立する手前で、人間と造形と環境の関係を再考する場であり、造形芸術を大きな物質循環のなかに置き戻す手だてを考える場である。理論ではなく、「なまの土」を用いた具体的な造形実践とそこでの気づきを通して、素材と形態、技術と場所のあるべき関係、作品や創作概念の更新の可能性を提示する。格差と紛争、気候変動が進む果てのポストヒューマンのアートと生活のために。

● 第 32 回デザイン基礎学セミナー
「システムと抵抗：デザインの限界点をめぐって」
日時　2025 年 1 月 30 日（木）
会場　九州大学大橋キャンパス・印刷実験棟 2F＋オンライン開催
講師　水内智英（京都工芸繊維大学）
趣旨　デザインは合理的に機能し、スケーラブルで代替可能な「システム」として物事を扱う視点を持つ。だが、例えば水俣における社会運動はシステム化されたデザインに対する「ひと」としての抵抗でもある。本来、デザインは代替的な現実を創り出すとともに、その創出者の変容をも結果する。デザインが関与してきた社会の歪みをデザインの力で乗り越えることは可能か。

● 第 33 回デザイン基礎学セミナー
「初期ロマンティークというデザイン：フランツ・シューベルトをめぐって」
日時　2025 年 10 月 14 日（火）
会場　九州大学大橋キャンパス・印刷実験棟 2F＋オンライン開催

講師　堀朋平（住友生命いずみホール音楽アドバイザー、九州大学ほか非常勤講師）
聞き手　山内泰（NPO 法人ドネルモ代表）
趣旨　「ここではない何処か」への抑えがたい衝動がロマン主義の要件であったとすれば、19 世紀初頭にあってその衝動は、いまだ国家や民族の色に染まることを免れていた。後代へと幾筋にも反射する純度の高い光源がここにはある。シューベルト（1797-1828）は私たちに何を投げかけた（Projekt/ Entwurf）のか？――精神分析やケア思想、フェミニズムの知見を借りて掘り下げたい。

- 第 34 回　沈黙から言葉へ:子どもの権利と回復を支えるデザインの役割

日時　2025 年 12 月 2 日（火）
会場　九州大学大橋キャンパス・印刷実験棟 2F＋オンライン開催
講師　田北雅裕（九州大学）
趣旨　子ども時代の感情の抑圧が社会に長期的な影響を及ぼすと指摘したアリス・ミラー（1923-2010）は、同時に、子どもを権利の主体として尊重し、回復の条件を示した。今回はその視座にも依拠しつつ、子どもを権利主体とする回復の公共圏をいかにデザインし得るのか、思想と制度、現場の実践を往復しつつ、ともに深めてみたい。

2. LITERACY
: デザイン基礎教育・共通教育の開発と実践

2.1. 授業設計

当研究センターの構成員は、主として以下の授業設計や実施に取り組んでいます。

- 基幹教育科目
  「デザイン史Ⅱ」「芸術学入門」
- 芸術工学部
  デザインリテラシー科目：「文化とデザイン」、「社会とデザイン」、「デザイン論Ⅰ・Ⅱ」
  コース間共通科目：「西洋美術史」
  未来構想デザインコース科目：「デザイン哲学」「環境倫理学」「クリティカルシンキング」「芸術文化論」「芸術環境論」
- 芸術工学府
  未来共生デザインコース：「デザイン哲学」「イメージ感性論」「美術史」「Design in Japan A/B/C」

2.2. 授業紹介

デザイン基礎学研究センターでは、芸術工学部全体にかかわるデザインリテラシー科目を中心に、様々な授業を共同して企画・実践しています。授業についてのフィードバックを共有し、授業内容の改善に努めています。そのうち以下の授業について紹介します。

- 2025 年度・春　未来構想デザインコース専門科目「芸術環境論」（結城・増田）

3 年生を対象とした「芸術環境論」では、学生たちが実際に図書館とその所蔵本を利用したキュレーションを実践することで、場所や環境と関係づけられる展示内容のデザインを体感的に学ぶ授業を実施しています。

授業前半では関連テキストの読解をつうじて、18 世紀末の近代社会の成立と同時に登場した美術館・博物館の制度としての歴史を学びつつ、それらが現在までにどのように展開してきたのかについて講義を実施しました。続いて、事物を収集・陳列することの根底にいかなる秩序が流れているのかという観点から、グループ毎にテーマを設定し、その内容について議論と文献調査を進めました。そして最終的には、芸術工学図書館の多大な協力のもと、今年はおよそ 20 名の受講生が 5 箇所に分かれ、来館者が実際に陳列されている本を手に取り、その世界に誘い込むことを目的とした展示を実現しました。

今年の展示は時節を反映してのことか、人工知能と感情の関係をめぐる著作を系統別に分類したものや、1970 年の大阪万博について当時の資料から賛否両論を提示するものなどがありました。ほかにも、学生たちが小学生のときに国語の教科書に登場した著作をあらためて陳列したもの、未来（もしくは、現在）のことをスペキュラティヴ(思弁的)に構想した過去の文献を陳列したもの、そして書物の触覚的な特性に注目して関連する文献を実際に触れるよう誘導した展示など、それぞれユニークなキュレーションが実現しました。

最終回には展示物を前に、図書の内容や陳列方法、装飾品、その場所や環境との関係などについての講評やディスカッションを実施しました。いずれのテーマについても受講生たちが選んだ文献の読解（内容）と展示（形式）を往還しつつ有機的に結びつけ、そのプロセスを楽しんでいたところが印象的な授業となりました。

1 週間の展示期間中には実際に各図書も貸出可能にし

ていましたが、終了後は展示のコンセプトと文献内容を紹介したコメントを、以下の図書館ウェブサイトに掲載して頂いています。どうぞご覧ください。
［九州大学附属図書館ウェブサイト Cute. Guides］
https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/art-environment-class/2025

● 2024 年・秋　スタジオプロジェクト
「デザインと日本 C」（結城・Ariane Beyn 講師）

令和 4 年度大学改革活性化制度「日本デザインを創造し国際発信できる人材育成のための教育プログラムの構築」の一環として、九州大学総合研究博物館および九州大学大学文書館の協力のもと、2023 年度より自然史系博物館へアートとデザインの視点を持ち込む、「アート・デザインのインターベンション（介入）」をテーマとした展示実践授業を英語で開講しています。2024 年度はドイツ、中国、イスラエルからの交換留学生も含めた受講生 12 名により、最終成果として、九州大学総合研究博物館にて展示・ワークショップ『時空 What is the size of time?』（2024 年 12 月 1 日開催）が企画・実施されました。これは、筥崎宮参道での芸術祭「Blue Way 2024」（主催：箱〇道実行委員会）のリンクイベントとして行われました。

また 2024 年度より、「デサインと日本 C-2（学府）/日本デザインの理解 C-2（学部）」を開設し、キュレーションに関する理論・歴史についてのゼミナールも同時に行っています。こちらは、日本、中国、韓国、ドイツ、イスラエル、ウクライナ、イラン、スーダン、シンガポール、インドネシアの 10 カ国からおよそ 20 名の受講生が参加しました。多国籍な受講生とともに、現代美術プロジェクトを積極的に推し進めている太宰府天満宮へのエクスカーションを行い、またディスカッションをベースに授業を進行することで、文化的背景・差異の理解を促すとともに、実践に必要な理論的補完を行っています。

3. SYSTEMATIZATION：
デザイン方法論の解明とその体系化の試み

3.1. 数理モデルデザイン研究会（Society for Math for Design）

丸山修教授を座長として、合計 4 回の研究会が開催されました。数理科学の専門家のみならず、生物学から社会学や哲学などの人文系まで、多彩な背景を持つ登壇者にご講演頂きました（以下、所属は当時のものです）。

● 第 6 回 数理モデルデザイン研究会
「育児のしやすい職場環境に向けた課題の析出――芸工内外の調査結果を踏まえて」
日時　2024 年 2 月 6 日(火）16:40~18:10
会場　九州大学大橋キャンパス 7 号館 1 階シアタールーム
登壇者　田中瑛（社会包摂デザイン・イニシアティブ）
趣旨　社会包摂デザイン・イニシアティブ（DIDI）では芸工内外の育児経験者を対象に調査を実施し、どのような職場環境の変革が求められるのかを析出した。本報告では、その調査結果を踏まえて、ライフ・ワークバランスの再設計に向けた課題を提示し、議論する。

日本の合計特殊出生率は 1.26 と長期の低下傾向にあり、その背景としてライフ・ワークバランスの問題が指摘される。特に「男は職場、女は家庭」という考え方が廃れ、夫婦共働き世帯が専業主婦世帯の 2 倍以上を占めると同時に、待機児童問題、不安定雇用の増大、所得や生活時間の減少など、育児と仕事を両立しながら生活を送るために必要な社会保障が上手く機能していないことが問題とされてきた。多くの教職員を擁する大学も例外ではなく、持続可能性という点で 2 つの問題があると考えられる。第 1 に、育児という営みに対して社会全体が対価を支払わず利用してきたことの問題である。生産性を優先し、育児を私的なこととして軽視する傾向は、出産の動機を損ね、結果的に生産人口の減少を招いている。第 2 に、意思決定層における多様な人々の包摂を阻むことで評価指標が画一的なものになるという問題である。例えば、育児負担の少ない研究者の方が、育児負担の大きい研究者よりも多くの研究成果を上げられるために業績主義は不公正なものとなっている。

以上の問題意識を踏まえて、実際の調査結果を報告する。まず、正規雇用がデフォルトとする働き方では育児に充当する時間を確保するのが極めて困難であるという事情が見られた。多くのパートタイム・非正規雇用の職員（主に女性）が出産や育児を理由に就労機会が損なわれていると感じており、他方で、正規雇用の職員（主に男性）は長時間労働や育休取得の難しさから育児への参加機会が損なわれていると感じている。そのため、職場の時間的・空間的な拘束を撤廃することを求める要望も多く見られ、変形労働時間制・裁量労働制やリモートワークの導入を通じた改善が示唆された。また、職場や社

会が提供する育児支援については、事前手続きの煩雑さや必要から緊急時に利用できないとの声が聞かれた。最後に、誰もが無理なく仕事と育児を両立できる環境に必要な取り組みとして、事務業務の自動化（RPA：Robotic Process Automation）や、ユニバーサル・ベーシックインカムなどのラディカルな社会保障なども取り上げ、その可能性について議論する。

● 第 7 回 数理モデルデザイン研究会
「開放系リアリティグラウンディング研究の紹介」
日時　2024 年 8 月 28 日（水）16:40~18:10
会場　オンライン開催
登壇者　竹市 博臣先生（理化学研究所 情報統合本部 先端データサイエンスプロジェクト）
趣旨　知性の本質と起源を解明する鍵のひとつが「身体性」であり、芸術や数学の抽象概念の操作も身体を通した物理的な対象の操作から発展したものと位置付けられる。光を含む電磁気、音を含む振動、自己運動と関係する力の作用が体制化され、感覚入力をもとに、時空間内の不連続な境界つまり表面の配置や運動、表面の性質としての反射や屈折、力学的な加速度や応答特性の把握も可能になる。たとえば肌触りをみる場合は、手を動かして、皮膚の感覚器で検出された力から筋運動で加えた力を差し引くことで対象物の力学的な応答特性（＝肌触り）を得る。物理量の推定に必要なものは境界条件と制約条件であるが、制約条件は感覚入力が非ガウス的つまりでたらめでなければ定まるので、感覚入力が予測可能であることに対応し、制約条件があればそれを満たす解の生成も可能となる。私たちは制約条件を満たす世界にリアリティを感じるが、その情報学的な意味を論じたい。

● 第 8 回 数理モデルデザイン研究会
「一代雑種品種の受粉制御技術〜ホウレンソウを例に〜」
日時　2025 年 2 月 28 日（金）16:40~18:10
会場　オンライン開催
登壇者　小野寺康之（北海道大学）
趣旨　遺伝的に異なる 2 つの親系統を交雑させて作出した一代雑種（F1 ハイブリッド）は、両親よりも旺盛に生育し、雑種強勢を示す。現在、トウモロコシなどの穀物や、キャベツ・ホウレンソウといった野菜の生産において、一代雑種（F1 ハイブリッド）品種が広く利用されている。特にトウモロコシでは、1940 年代から一代雑種品種の本格導入により単位面積あたりの収量が飛躍的に向上したことが知られている。

一代雑種品種を作出するには、自家受粉や系統内交配を抑え、親系統間の交配のみが成立するように受粉を制御する必要がある。一方で、一代雑種品種の親系統を維持するには、逆に自家受粉（またはそれに代わる交配）のみが成立するよう制御しなければならない。したがって、一代雑種品種を安定的に生産するには、状況に応じた受粉制御技術が不可欠である。

作物の種類によって、さまざまな受粉制御法が用いられている。ホウレンソウは基本的に雌株と雄株が分かれる雌雄異株の植物である。かつては、一代雑種品種の生産において、種子親と花粉親のいずれにも雌雄異株の系統を用いていた。そのため、受粉の前に種子親系統から雄株を取り除く（除雄する）ことで、系統内交配を防いでいた。現在では、除雄作業の負担を減らすため、間性（雌雄同株）系統を利用した受粉制御法が用いられている。

本講演では、ホウレンソウにおける受粉制御技術と、その技術的基盤となる遺伝的な性決定機構について紹介する。

● 第 9 回 数理モデルデザイン研究会
「科学と哲学の境界――圏論を巡って」
日時　2025 年 4 月 2 日（水）16:00~17:30
会場　九州大学大橋キャンパス・デザインコモン 2F
登壇者　平松千尋・古賀徹（九州大学）
趣旨　近年数学の基礎論としての圏論が様々な分野で注目を集めている。科学と哲学の近くて遠い関係をどのように考えるか、生物学の分野から平松千尋、哲学の分野から古賀徹が語ります。

3.2. ウェブサイト「デザインの基礎概念」

デザイン基礎学研究センターのウェブサイトでは、デザインの体系的理解を推進するためにダイアログを構築し、それに従ってデザイン史やデザイン思想の基礎概念についての執筆を進めています。芸工内の多くの教員の方々や学外者にも執筆頂き、すでに現在 44 項目の記事を日本語・英語にて掲載しています。

この間、以下 7 項目の記事が掲載され（近日公開予定を含む）、「混沌マーク」「高次のデザイン」など、芸術工

学研究院の設立に関連する項目も新設されました。そのうち、1 項目を以下に転載します。

【新規執筆項目】
- 「高次のデザイン（小池信二）」（執筆者：古賀）
- 「混沌マーク」
- 「善悪の技術（ソクラテス）」
- 「デザインの行為者性」
- 「モナド論」
- 「要素還元主義（デカルト）」
- 「メディア考古学」（執筆者：増田）
- 「システミック・デザイン」（執筆者：水内智英）

「高次のデザイン（小池新二）」

「高次のデザイン」とは、九州芸術工科大学（福岡市、1968 年創立）の初代学長である小池新二が提唱した概念である。九州芸術工科大学は、技術における人間主義（技術の人間化）を建学の理念とし、デザインの国立単科大学として日本で初めて設立された。その設立準備室長であった小池は、設置時の大学案内（1968）において、大学の目的について次のように述べている。

> 目的：科学および芸術を総合し、その全体的な精神による高次のデザインを確立するため、これに係る専門の学術を研究教育する。（九州芸術工科大学『九州芸術工科大学―設立に至るまでの審議経過の記録』、芸術工学研究、2000 年、166 頁以下）

なにゆえに「科学と芸術の総合」なのか、「高次のデザイン」とは何かについて、引き続き「本学の使命」と題された綱領的文言が詳細に説明していく。すなわち、「近代の科学技術は、それぞれの分野の専門分化によって、著しく進展し」たが、「それと同時に、時として『技術』の独走におちいり、いわゆる人間疎外の現象が現われていることもまた否定することはできない」。そのうえで「『技術』をその本来あるべき位置に正しくすえ、かつ、いかに機能させるかということは、技術を特色とする現代文明最大の課題の一つである」と主張する。

1968 年と言えば、高度経済成長の弊害として公害が発生し、また、東西冷戦を背景とした核兵器の開発競争、ライン労働のような産業における人間疎外などが問題化していた時期である。人間性を発展させるはずの技術が人間から疎遠なものとなり、機械的に「独走」し、有機的発展を望む人間性の障害となっている。そしてその状況を改善するためにもっとも重要となる理念が「技術の人間化」であると主張される。

> 技術の人間化とは、一つには、技術の発展自体を人間的基準に立脚して進めることであり、二つには、技術の発展を人類の福祉と人間生活のいっそうの充実のために役立たせることである。言い換えれば、技術の基盤であるところの「科学」と、人間精神の最も自由な発現であるところの「芸術」とを総合し、その全体的な精神によって、技術の進路を計画し、その機能を設計する。すなわち、きわめて高次のデザインを確立することである。

「人間的基準に立脚」という文言は、まさしく技術の人間主義を指している。それを受けてこの綱領は「人類の福祉と人間生活」の充実を挙げる。その鍵は「芸術」だと名指されているが、それは狭い意味での高級芸術や造形芸術だけではなく、広い意味での人文諸科学、つまり特定の目的に拘束されない有機的な探究の論理を指している。だとすれば、ここでいう両者の「総合」とは、一方で「独走」する科学技術の機械論的な自動運動を「人間精神の発現」としての有機的原理によって統御し、他方で機械論の外在的・偶然的性質によって有機論を開き、より包括的な有機性を展望するという相互的関係を意味することになろう。有機性と機械性とが相互に刺激しあうことによって、技術連関のうちに生きる人間――利用者だけではなく制作者――の魂もまた、機械的な独走状態に従属する他律的なありかたから離脱し、さらによく、さらに豊かに展開することができる。

小池によればこれを実現するのが「高次のデザイン」である。ここには産業や資本の利益に奉仕するために製品を美的に装飾したり、それによって生活者を無用な消費に駆り立てたり、人間にとって何が真に必要なのかを自分の頭で考えることなく注文主や上司の要求に従ってただ手を動かし、結果的に人間を不幸にするデザインのあり方への批判が含まれていると考えられる。

これに対して、人間にとって真によいものとは何かを根底から考えることにより、現代技術とそれを支える近代科学の機械的なあり方に人間性の観点から介入し、様々な専門技術をそのために統合していくことが小池によれば「高次のデザイン」である。小池新二は「芸術工学の目指すもの　その教育的側面」という文書（同『記

録』所収）において、各専門技術を人間性の観点から統合する技術者が欠けていると主張し、そうした高次の技術者を「ミッシング・テクニシャン」（見失われた技術者）と表現している。

> 近代の工業社会が複雑な工業技術を発達させるに従い、工業が社会の様々な要求に対応して、一つの製品をまとめ上げるために総合組織者（Coordinator）を必要とすることは、航空機や自動車はもちろんのこと、建築物からスプーンに至るあらゆる製造工業について痛感されながら、そのような技術者は、一体どこに求めたらよいのか、それにはどのような専門知識が要求されるのか、誰もはっきりした説明を与えられないできた。そのため、欧州ではこのような技術者は久しく missing technician と呼んでいた。

小池は「ギリシャ以来の伝統を持っているヨーロッパでは、初めテクネー（art and technology）の総指揮者である建築家がこのような役割を演じていた」と述べて、その代表例としてベーレンスやグロピウスを挙げている。小池にとって、機械的に「独走」する産業社会の論理に有機的な論理によって統制をかけるという人間中心的なデザインの理念は、ウィリアム・モリスに端を発し現代の機能主義に至るモダンデザインの伝統が体現するものであり、それは結果的に人間以外の自然環境の維持に資するものであった。（古賀徹）

4. DIVERSIFICATION
：デザインにおける文化的多様性の推進

当センターの構成員が企画・参加したイベントのうち、「文化的多様性の推進」にかかわる一部をご紹介します。

4.1. Ebb + Flow: INTAC (International Art Collaboration) 2023-2024 成果展

日時　2024 年 3 月 15 日(金)〜3 月 21 日(木)10:00~17:00（土日祝除く）
オープニングイベント： 2024 年 3 月 14 日（木）15:30~16:30

会場　九州大学大橋キャンパス 芸術工学図書館および 1 号館ギャラリー

主催　九州大学大学院芸術工学研究院／令和 4 年度大学改革活性化制度「日本デザインを創造し国際発信できる人材育成のための教育プログラムの構築」／2023 年度スーパーグローバル大学創生支援事業（SHARE-Q）

2023 年度秋学期に開講した COIL 型授業「INTAC (International Art Collaboration) 2023-2024」（担当：結城）の成果展を大橋キャンパスで開催しました。

2023 年度は「Ebb+Flow（潮の満ち引き）」をテーマに、九州大学大学院芸術工学研究院と海外 4 カ国の芸術系大学（University of Europe for Applied Science（ドイツ）；Ontario College of Art & Design (OCAD) University（カナダ）；Tampere University of Applied Science（フィンランド）；Autonomous University of Mexico State（メキシコ））をオンラインで繋ぎ、共同で作品制作を行いました。授業は、オンライン上で小グループを作り、Zoom、Teams、Miro（オンライン・ホワイトボードツール）、Slack、Instagram、Google Translate などの ICT（情報通信技術）を活用しました。

最終成果発展のために、ドイツ、カナダ、フィンランド、メキシコから受講生約 25 名と担当教員 4 名が大橋キャンパスに来校しました。これは、受講者および教員が初めて直接会う機会でもあるため、展示準備期間中には福岡市内のアート・デザイン関連施設へのエクスカーションも企画し、交流を図りました。2024 年 3 月 14 日（木）に芸術工学図書館閲覧ホールで行われたオープニングでは、2010 年から続く「INTAC」の歴史について語るとともに、COIL 型授業のデザイン・アートの実践・制作への応用の可能性について、担当教員によるパネルディスカッションを行いました。

4.2. フジイギャラリー3 周年記念展示：VISIONS—抽象/写真をみる—　Sato Shintaro Photo Exhibition

日時　2025 年 2 月 3 日（月）〜3 月 5 日（水）
＊土日祝日閉館

会場　九州大学伊都キャンパス　フジイギャラリー・ギャラリー2（G2）

主催　九州大学総合研究博物館

共催　九州大学大学院芸術工学研究院／令和 4 年度大学改革活性化制度「日本デザインを創造し国際発信できる人材育成のための教育プログラムの構築」

後援　ふげん社・PGI

協力　キヤノンマーケティングジャパン株式会社

本展は『触発を促し創造性を育む「発想する空間」』と

いうフジイギャラリーの基本コンセプトに基づき、写真家・佐藤信太郎氏のご協力のもと、展示物と自由に向き合うことを目的に九州大学総合研究博物館により企画されました。スタジオプロジェクト科目「デザインと日本C」の受講生 2 名が中心となり、展示コンセプト作りから印刷物や会場のデザイン、会場設営までを行いました。また会期中、展示室内でいくつか授業を実施するとともに、芸術工学研究院と基幹教育院の協働でアートをテーマにした英語セッションや英語学習を楽しくするようなワークショップも企画されました。

4.3. デザインのギミック展

会期　2025 年 2 月 28 日（金）〜3 月 2 日（日）10:00~17:00
会場　九州大学大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟 2F スタジオ 6
主催　九州大学大学院芸術工学府 未来共生デザインコース尾方義人研究室
企画　山田敦貴
企画協力　永井敬二
共催　九州大学大学院芸術工学研究院・デザイン基礎学研究センター

4.4. カリーナ・ニマーファル≪非同時的なモノたち：帝国と環境≫展

第 1 部　≪非同時的なモノたち:帝国と環境 －リサーチとケアのための場－≫
会期　2025 年 3 月 11 日（火）〜16 日（日）
会場　九州大学大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟 2F スタジオ 6

第 2 部　カリーナ・ニマーファル≪非同時的なモノたち：帝国と環境≫展
会期　2025 年 5 月 17 日（土）〜6 月 15 日（日）の土・日曜日（全 10 日間）10:00~16:00
会場　九州大学箱崎サテライト（旧工学部本館 1 階 146 室）

主催　科学研究費助成事業基盤研究（C）「大学博物館におけるアート・インターベンションに関する理論調査と展示実践」（課題番号：24K03582 研究代表者：結城円）
協力　九州大学総合研究博物館／九州大学大学院芸術工学研究院／オーストリア連邦芸術・文化・公務・スポーツ省／遊花遊月

芸術工学研究院の招聘により、オーストリア人のアーティスト、カリーナ・ニマーファル氏が、2025 年 2 月から 3 月にかけて約 2 か月間福岡に滞在し、九州大学総合研究博物館のコレクションを調査しました。その成果が、二部構成のアートプロジェクトとして結実しました。

第 1 部は、2025 年 3 月に大橋キャンパスで開催された展示です。博物館に収蔵されていた歴史的な木製家具をキャンパス内のギャラリースペースに移設し、デザイン、林業、環境史、帝国主義、物質的な知、超歴史的な展示実践、展示戦略といったテーマを含む資料とともに展示を行いました。

プロジェクトの第 2 部は、九州大学総合研究博物館館内に、「カフェのような読書室」を出現させるアート・インターベンション（芸術の介入）を行いました。本作は、林業、生物多様性、そして第二次世界大戦前後の日本の木材貿易の歴史に関する大学コレクションを出発点としています。本展では、大学コレクションを新たな視点で捉え直すアーティストによる語りのテキストを中心に据え、アーティスト自身の調査や制作プロセス、芸術と科学の関係性についての考察などが織り込まれています。さらに、それらのテーマやモチーフは、展示されている書籍や資料の中にも再発見することができます。

この企画にもスタジオプロジェクト科目「デザインと日本 C」の受講生が通訳およびリサーチ補助として関わっています。また芸術工学研究院のプロトタイピングラボが、展示物のひとつである 3D オブジェクトの制作を行いました。